

研究所だより

第433号
2021年 9月 7日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ とんぼのめがねは 水いろめがね
青いおそらを とんだから とんだから
とんぼのめがねは 赤いろめがね
夕焼け雲を とんだから とんだから ”
『 とんぼのめがね 』 童謡 1949年(昭和24年)



～2学期スタート～



今年の夏、特に8月は太平洋高気圧の縁を回って持続的に流れ込む湿った空気や西日本に長く停滞した前線の影響で大気の状態が非常に不安定となり、局地的に猛烈な雨を観測するなど断続的に雨が降り続き、記録的な大雨となりました。県内でもがけ崩れや土砂崩れなどの被害をもたらしました。

1日(水)には地震に備え県内一斉に「シェイクアウト(地震から身を守る行動)訓練」が行われました。各校では、「自助・共助・公助」「自分の身は自分が守る」を合い言葉に災害に備えての準備・訓練を徹底していきましょう。

2学期が始まり、児童生徒の元気な顔、声が学校に戻ってきたことでしょうか。コロナ禍であっても、子どもたちは長期休業でなければできない貴重な体験をしてきたと思います。

2学期は、運動会をはじめ教育文化展や音楽祭など諸行事の多い学期です。コロナ禍で何かと制約を受けますが、行事を通して仲間づくりや地域の皆様と関わりを深めることができる学期でもあります。蓄積されたエネルギーをフルに生かし、地域と連携しながら実りの多い2学期であって欲しいと思います。

＝夏休み明けの学級づくり＝

コロナ禍のなか40日余りの家庭主体の生活から学校生活へ戻ってきた子どもたちにとっては、学校や学級で夏休み前にできていたことができなくなったり、築き上げたことが崩れたりしていることがあります。再確認しながら様々な取り組みを始めましょう。



【ルール・マナーの再確認】

みんなで気持ちよく集団生活を送るためのルールやマナーの意識が薄れ、夏休み前に身につけていたものも忘れていくことが多いでしょう。そこでまず取り組みたいのは、人と関わるときや集団で生活するときのルールやマナーの再確認です。学級の実態に応じて、みんなが楽しく快適に学級で生活したり、活動できるように、ルールやマナーをいくつか決め、全員で守れるようにしましょう。

ルールやマナーを確立するために担任から強制的に守らせることは、子どもたちの反発を防ぐために避けた方がよいでしょう。ルールやマナーは、人と関わったり、集団生活で楽しく活動したりするために、人間が編み出した生活の知恵であることを十分理解させた上で、子どもたち自身で決めさせ、取り組むようにしたらどうでしょうか。

また、各係活動や委員会活動等の中で、学級での存在感を植えつけ、互いに認め合う雰囲気づくりをすることで、集団を高め合うことができます。特に行事が多い2学期は学級集団を高める絶好の機会です。行事で集団を高める。行事が集団を高める。学級担任の腕の見せ所です。

G I G Aスクール構想 一人一台端末時代の学校づくり

第1回 基本の理解

玉置 崇 教授(岐阜聖徳学園大学教育学部)

1. G I G Aスクール構想に良いイメージを

教職員は、G I G Aスクール構想という言葉を目にして、どのようなイメージを持つと思いますか。学校現場の何人かの方に聞いてみると、「G I G Aという言葉は、とても難しそうな印象がある」「G I G Aという言葉から何も連想できない。何が始まるのか不安」「なぜ、このような伝わりにくい言葉を発信するのだろうか」といったマイナスのイメージを持つ方が多いようです。G I G Aとは「GLOBAL and Innovation Gateway for All」の略なのですが、説明すればするほど、よくわからないという方が多くなるようです。

そこで私は、G I G Aスクール構想を「一人一台端末、高速ネットワーク回線、クラウド活用」という三点で言い換えています。これなら、具体的なイメージが湧いて、よくわかっていただけます。

さらに、具体的な子どもの姿を伝えることがあります。

- 授業中に疑問に思ったことを自らインターネットで検索する。
- ネットワーク上に表示された一枚の写真の中で、不思議に思うところや調べてみたいと思うところに赤丸をつけている。同時に他の子どもがどこかに赤丸をつけているか、手元の端末で見ている。
- 音楽室に端末を持参して、作曲ソフトで音楽を楽しんでいる。
- 体育館にも端末を持って行き、自分のマット運動を動画撮影してもらい、それを見て改善点を探している。
- 端末に入っているドリルを使って自ら計算練習をしている。
- 授業終了時には、いつもふり返りを個人データベースに書き込んでいる。また、ネットで級友とふり返りを見合うなど、ネットワークを活用して学び合いをしている。

このように、端末を使っている様子が目に浮かぶように伝え、G I G Aスクール構想に良いイメージを持ってもらうとよいでしょう。



2. 端末を道具として認識できない教師

前述のように、子どもの学びの姿を話すと、首をかしげる方がおられます。それは簡単に言えば、端末を道具として認識せず、学習の教具として捉えているからでしょう。

これまでは、端末は一人一台ずつの配備がされていなかったため、端末は教師が教えるための道具(教具)として認識されてきました。この捉え方を一人一台配備となっても変えられない方が、実は多くおられるのです。コンピューター室で授業をしていたときのイメージをそのまま持っているようです。

例えば、

- ・子どもが教師の話に集中するように、コンピューター画面を一斉にロックする
 - ・指示があるまで、キーボードに触れさせない。
 - ・教師のコンピューター画面を子どものコンピューター画面に転送して、その画面を見させながら、教師が説明する
- といった授業風景です。

極端な表現をすると、「子どもは自由にさせると、コンピューターを使って他事をする。だから一斉指導をきちんとしなければいけない。教師は子どもをしっかりコントロールすべきだ」という指導観を持っておられるのです。

こういう考えの教師は、指示もしないのに子どもが机上の端末を、勝手に操作することは、授業が乱れることになる、と思われるのでしょうか。

ベテラン教師の中に多いのは、自分が子どもの頃に受けた授業イメージをいつまでも引きずっている方です。教師の話をしっかり聞き、発言する時は挙手をして指名を受けてから話すという、いわば伝統的な授業での学習習慣を大切にしている教師にとっては、G I G Aスクール構想はとんでもないことなのです。

3. 端末を定規と例える

このような教師の考え方を一度に変容させることはなかなかできませんが、次のような問いをもとにやりとりをしたらどうでしょう。

「授業中、ある言葉の意味がわからないので、手元の辞書で調べた子どもがいました。この子どもに先生はどう言葉をかけられますか」

この問いに対して、「勝手に調べてはいけない」などと否定的に判断した教師はいません。「疑問に思ったことを進んで調べることはとても良いことだ」という肯定的な評価をします。

「そうですね。自ら進んで調べる子どもを育てたいですね。端末は即座に辞書にもなるのです。便利なものです。先生も調べ物をしようとされるときには、今や、辞書よりもスマホを活用されているのでありませんか」と端末活用を価値付けます。

「端末は教室に置いておくべきで、特別教室などへの移動時は落として壊す可能性があるので持たせない」という学校があります。

学習道具の定規は、筆箱に入れてどこにでも持参します。端末を道具として捉えれば、どこにでも持参すべきものです。定規や端末は、場所を限定して活用するものではないからです。

GIGAスクール構想の具現化には、最初に「端末道具論」をしっかりと共有化しておくべきだと考えています。

☆第71次土佐清水市教育研究集会・一日教研☆

8月4日（水）に第71次土佐清水市教育研究集会・一日教研を開催しました。今回は、新推進体制となって、初めての全体会（開会行事・講演）となりました。開会行事では、7月に着任した岡崎 哲也教育長から「土佐清水市のめざす人間像、新型コロナウイルス感染症の対策、教育振興基本計画Ⅲの取組、学力学習状況調査の分析を生かす取組、GIGAスクール構想の取組等について」、佐竹 正史委員長からは「新推進体制における教研の在り方・方向性等について」熱く語っていただきました。

講演では、高知県教育委員会教育政策課 中上 克之主任指導主事を講師にお招きし、「先端技術の活用による学びの個別化～ICTやAI等の先端技術の活用～」と題して、“TEAM 土佐清水”で1人1台活用していくために「ヒト」の連携、「モノ」の連携、「コト」の連携についてくわしくお話ししていただきました。特にデジタル技術を活用した「学校の新しい学習スタイル」の構築のための事例紹介や実際にタブレットで学習支援ツールの機能を効果的に使うための演習、今後の各校での取組についてのグループ協議など熱心に研修を行われました。今回の研修では、市教育委員会をはじめ、県教育委員会、西部教育事務所、清水小学校、中央公民館にいろいろとご支援をいただきました。

○全体会



〔岡崎 教育長挨拶〕



〔佐竹委員長挨拶〕



〔中上指導主事講話〕



〔講話〕



〔演習〕



〔学校別協議〕



〔算数・数学部会〕



〔教育相談部会〕



〔養護部会〕

○部会研修



〔社会科部会〕



〔理科部会〕



☆感想☆

○ 自分の授業でなかなか生徒たちにICTを活用させることができていなかったため、2学期以降、活用させる場面を多く作っていきたくて思いました。

Classroomで課題を出したり、全体で共有したりということなどをやってみたいです。

全体で共有、また相互評価等するとすると、明確なルールが必要になってくると思うので、そのあたりも学校全体で徹底していかないといけないと思いました。

○ 実際にタブレットを操作しながらの研修でしたので、楽しく、意欲的に研修に取り組むことができました。使いこなすことができれば、働き方改革につながるし、これからの時代、子どもたちには必要な学習だと思いました。様々な機能があることはよく分かったのですが、自分が参加する側の研修なので、子どもたちに活用してもらうためのシートの作り方等、先生側の研修も必要だと思いました。タブレットは、保管庫に入れており、使用前にカギを開けて取り出しているの、いちいち取りに行くのが面倒です。学校で改善していきたいと思います。

○ タブレットは使いこなせば、便利だと思います。単元テストもタブレットで回答送信できると、集計・入力作業がなくなり、業務改善になるのではと思いました。便利ではありますが、タブレットでテストをし、採点も自動で行くと点数だけに目がいき、児童生徒のつまずき、どこをどう間違っているのか（理解できていないのか）把握しにくくなるのではと思いました。（点数しか見えなくなるのではと心配）タブレットを活用することに目がいってしましますが、授業力があってこそそのタブレット活用であることを再認識しました。

～あすなろネットワークの取組～

8月23日（月）第2回あすなろネットワークを開催しました。今回は清水小学校の松下 泰将教諭を講師にお招きし、「事例から考える特別支援学級における指導・支援」と題し講義・演習をしていただきました。

先ず初めに、本日の流れ「①自己紹介 ②講義・演習 ③質疑応答」を説明し、ウォーミングアップを兼ねて、早速隣同士で自己紹介をし合いました。緊張が解れたところで、先ず講義として、「特別支援教育の実情の確認、特別支援学級について、特別支援学校と比較して、特別支援学級の教育課程（実態に応じた教育課程）等について」を分かりやすく話していただきました。そして、「困った行動」についての事例を基に演習を行いました。



〈講師：松下 泰将教諭〉



〈講話・演習〉



〈講話・演習〉



〈振り返り〉

☆感想☆

○ 特別支援教育の実情を詳しく知れたのはよかったです。「自立活動」についても、学習指導要領解説（自立活動編）をじっくり読むことが大切だとわかりました。これからの指導は根拠を持っていくことが大事を実践していきたいと思いました。いろいろな事例を通して子どもを見とり、それからどう指導していけばいいのを考えさせられました。隣人同士で話し合えたことも楽しく、一緒に考える場面ができてよかったです。ありがとうございました。

○ 「見通しをたてる」「見通しをもたせる」ことは何事においても重要だと思われます。ゴールの見えない活動ほどしんどいことはないのですから、今回の講演を通して、改めてこのことの重要性や必要性を日頃の教育活動において再確認をしました。指導や支援を要している生徒に、適切に、適度に行えているかどうか重要で、ややもすると過度、過剰になりがちな側面もあるし、知識が不十分、対処が不適切なことがあると思う場面や状況があるようにも思われます。

欲を言えば失敗事例を紹介していただき、そこから考察した発表も聞かせていただければありがたかったと思いました。

○ 貴重な話しを聞ける場をつくって下さりありがとうございました。事例をもとに話しを聞いたので、とても分かりやすく、勉強になりました。どの年齢でも“見通しが持てる”ということは大切なことだと改めて感じました。ありがとうございました。

＝研究協力校の取組＝ ～実るほど頭を垂れる稲穂かな～

三崎小学校では、研究テーマに「『地域との連携・協働』を通して自立する児童の育成」を掲げ、活動計画の1つに「田植え（米作り体験・収穫・餅つき大会）などの体験活動を通して、「山・川・海のつながりを考える」ことを位置付け、全校で取り組んでいます。

8月6日（金）には、地域・保護者の皆様のご協力により5、6年生が黄金色に実ったお米の収穫を手刈りで行いました。地域・保護者の方の説明をきちんと聞き、実った稲をしっかり掴み、一生懸命刈り取っていきました。支援してくれたお父さんが「一生懸命に取り組んでくれたから、早く刈り取ることができました。」と笑顔で語ってくれました。次は餅つき大会です。

